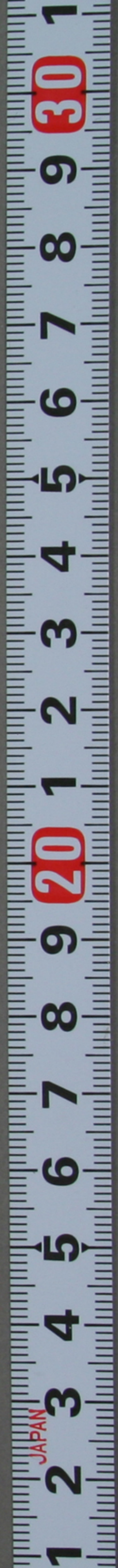


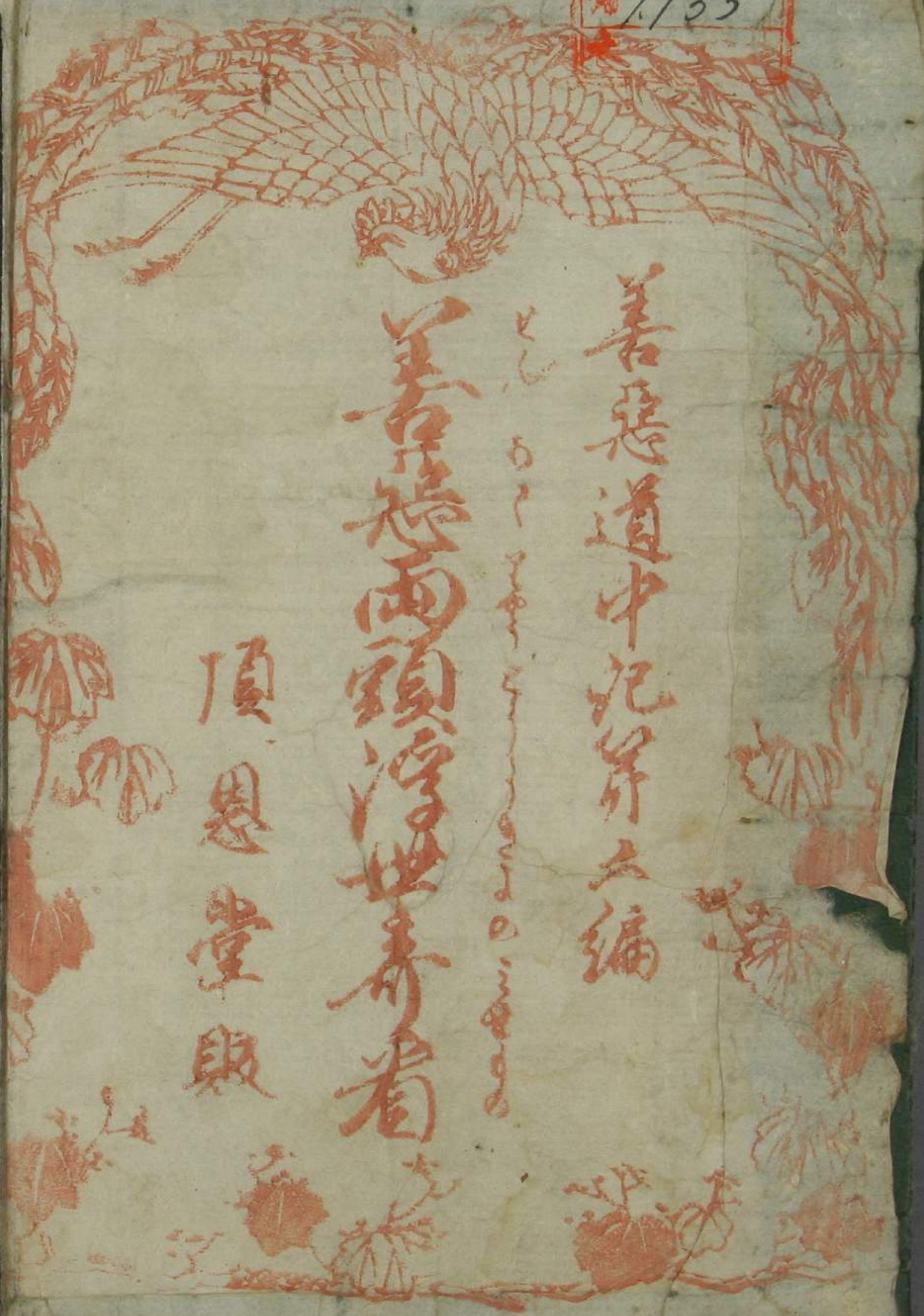
善惡兩頭浮世奇看

全

特
3 遠へ
1955



13
1955



善惡道中記并六編

善惡兩頭浮世奇看

頂恩堂殿

善惡兩頭浮世奇看序

茶筒机の兩頭の獸あり命々鳥を雙首は

禽形を叔教兩頭は蛇を埋め宋玉並頭の蓮

を賦は康叔の二徳の木王濬が三莖は瓜瓞

是吉凶の示の天機あり蓋人の心善惡

邪正の事變譬が一身あり兩頭は

善進の善と惡の惡を走れども

善くも我任たる事には大故小前よ小善
我をそと心えをら後お大悪を侵まこと人情は
常なりとれど西施が宿伎の下宮街に病の
両頰を視多驚の涎流不知始皇が後妃顔
双枕の影法師を窺て店配は趙高とま心で
飛ん謀叛を萌て結成が銀世界の居墜まら
一の衣小雙首は中睦——驚氏の一婦は

相合膳よの外面姉妹の如くよや宮本荒
本が武術の両刀の英名をよむれが親分の
食客の二本筆の脚を番符捧お持扱あつ
何某關白ら雙重の臚はけしと聞けども
二枚の舌の戯作者の癖めくくよ放免
懸取を敷く然るも此善悪道中は著家
一筆菴主人二つの體はくや中黄泉の旅へ

行脚せしむる殘編をぬりて絶つる仍る書房
 頂恩堂のほろぐ予其末巻を綴りて需む
 彼一筆翁の画工著述の両顔めく辭断道
 さぬ流時尤子好むむに雙車同ぐか流し
 画のまゝ文み劣る拙繪もわんを奇変怪異
 もつる六百屋の店あむぐ一寸の所用の足人
 あり夫か見まむ僕あんど人並み嗜の片け

此も文才み至るくく臺文はも同擅は染
 塵紙看のうゝ観かく是もまのちと増
 見世物ももまふぬ

昔嘉永二己酉年九月上旬方癡飯倉
 神明の土産子鬻鬻く破風箱の形舟逐色く
 一昼夜ふ稿が兒を

樂亭西馬題



善惡道中記全迷所一覽等四編迄
一筆菴溪齋先生著述

同五編 善惡色欲二道話

同六編 善惡兩頭浮世奇看

同七編 善惡擯猛途意

右之巻樂亭主人編次引續出版仕ゆる
所末は高覧を弄す

夫人間の善惡の唯心の定めを護るれば都て日用の
雜事の不及び一日の投觀とも其見よりの聞りは
道をとり遠れば惡とあり是は能くして道を守らば皆善
を勸るの一助と成ぬを登へハ戯場の狂言の敵役謀叛人
さあぐの奸計暴悪を働くとも終に善人の爲不亡び矢ぬ
又色欲ふける男女の一旦の誤りよりそれ、憂難難なる
ハ其身の飛ぶて已くか求むる所を以て何と善きりけり
あふ思案の外との人心より引出きて諸人み害にあら



いふくで
あひま
あひま

けい
あひま
あひま

生
の
早
あひま
あひま
あひま

あひま
あひま

あひま
あひま

あひま
あひま



あひま
あひま

あひま
あひま

あひま
あひま

あひま
あひま

あひま
あひま

あひま
あひま

あひま
あひま

あひま

あひま

悪人との異あり故未ふり先兆をくみて又安堵に至る

こま皆善悪邪正を種と喜怒哀樂をむねとあり

つる夏枕小見ざれば銘々誠ともあるべし

梅里の街ふりて諸人心を蕩し魂し天界ふ飛も

宜あり孫養ふ養つる老人さへ朝夕不足のあまりの

此廓ふりて心の若かくを樂しむありされど是を

善悪の道理をりて悟る時ハ梅女藝者へのふ及を

めい高金少て抱られし身ありハ夫程の苦界の

勤めを給ふる能客を食應より客我梅にその

おの其業を励む怠るざる是を續けて茶座

舟宿やうそ若みのに至る迄其業小苦しむあらん

未社がほと酒ふ二日酔の苦しまり我家らくは

一盃飲ころそ謀の樂しあるべしれども業とありて

吾理ある酒も吞給じさ夜もいとほさるべし其申す

己の業を捨て世世界の戯を養藝のそと敬そら

何事ぞ廓中数千人のうら居續する我をこのり

天理ふくけ外へ皆その業を執も世と悟るとん
巻中の画のごとく

九生ある日の一日たりとも其業のやまをみだらそ
天の道ふ順ごどく一髪バ電とり物のま心を結くひ
蚤蚊の人を刺し猫の鼠をとる知の人を噂路の時
をうらむ鳥の東雲を告る皆夫くの業なうごどくや
世界へい合持といえる獲あつたれへ朝夕人の大切ふ
とどろき身一ハ火の光あつ是又一時由あつて叶らぬ

いの思しきりの世火のこめ小身とを夫ハ一命をおと
けりかぞへごころされども人の家百年由二百年の焼る
夏あつたれバ猪織人本竹其外の後世難義なるべし
水も供あつて田畑家を損むる取らざる又早損の場へ
十分の徳を得ん秋仍てぬい合持の所由常ふ忘ごれ
バ自ら由断あつ善事小せむむべし
四奈河原の見世物さそれくの善悪何りまづ猿狂
言ハ善怒哀樂の嘆れ場同者の姿々小洞を杖ハ世曲馬の



おのれん
おろりのやじんか
あのか

骸
らいつね

骸
らいつね

骸
らいつね

鬼
骨

おのれ
の
おのれ

おのれ
の
おのれ

おのれ
の
おのれ

おのれ
の
おのれ

おのれ
の
おのれ



おのれ
の
おのれ

おのれ
の
おのれ

おのれ
の
おのれ

おのれ
の
おのれ

おのれ
の
おのれ

おのれ
の
おのれ

おのれ
の
おのれ

おのれ
の
おのれ

轉業意馬心猿の手綱をゆるめば火と猿の角力よく
人のおしへを利ひて見物をとる君合族の鈕ぎの刃轉
業の一奉細留浮世のつらさあまきこそ慧まあるべし
つらさの中あも愛生の小娘坐禪の相撲火の岩戸のお戸能
あごの善悪あもたえかごとくみ其日の業ありとも
余りもろ多れ心得あり川小流う死骸もろ女の後目
て全身をたのむらび廿四孔の辻君と人聞をたどりけり
ふ見せび嗚呼禽獣も心はれべ人間小迫し神のともえ

の一身我我く人道捨るはみふぞや
其見せりのふよりてひとりの善悪をま有りあり
丹波國より世孫ゆせは是箱根うらまの河ちある
山東の冊子より産出しる善悪抄ふむく
何つとまこの國猿蟹郡花咲町といえる野ふ山川を
桃右衛門とて高人あり年四十をせしむも一子もた
を憂ひて家も年古く持傳えし西王母の一軸けり
あまふ一心をうけ日毎朝夕祈りしふ松右衛門妻ある



日せんく川の岸を通りし川上より柳の蔭を歩
 び見つけ拾ひとりて見るに二ツの莖は柳の葉の二ツ
 生るる小ぞらつちを例の葉ありあふ言つちありあ
 りふるを既ふ二ツ生るふ夫由つち内へりち帰
 てはまうり同面しき柳をれば夫ふ見せこれと二人
 して喰ひけるふちりあ〜だ二ツの葉へ味ひ甘く風
 味よく又二ツの方の苦く志ぶ〜同〜莖ふ生あう〜
 柳味の異あるへ不思議の夏と思ひたり

柳花右衛門が妻への柳を喰てよりなるあふぬ身とな
 りたれば夫由夫さふ悦びこまふ〜西玉母のまらけ
 めくるあうんと月のまらるを待程ふを疎月れいり
 安産して玉の如き男子を産おと〜なる怪〜以
 うあけ子の顔二ツありて〜と二女あふの柳のめく〜あそ
 けりたる柳花右衛門夫婦の両顔の男子をけりけりてあふ
 うれひるるが不足ある子の不便といえる〜又西玉母
 の授けあくる子あるれば柳の〜あふ及つた程〜生長〜

つら渡世を嫌ふるは出家とあり一異様之罪を積む
と生ひ小其心めて幼り育ける

あるふは子生色に志さず右の顔の色白く鼻筋通り
て眉目形兼つて赤らうて少背はう又左のかしら

色悪く鼻ひらたく眼つらうて甚この悪相あり
是先年拾ひたる桃の実一つの中一つは苦くなる

かかる異形の子成るべきか否よそなりたる
叔面顔の悴生く志さずひて悪相の首へ酒を好む

まづ善相のくびの癖とこの心は是酒へ食物の中にて
悪ありあり癖の食物のうち善あり其疾へ先

古人も酒を狂茶といひ又憂情ありともいふ俗に氣遣水
とひて人の心を乱し氣の小さるものもこれを愈々

太臆とあり金銭を多し病ひをまし災ひを引込
て終ふ其身を損ひ家を破る方これ酒のせい悪

故也少く呑とも多きまどはるるは又餅を喰ひて
身を亡し家破りしるふの世を聞かば然るは善

子どもが
あつたのも
おれが死んで
こゝろがうつり
てゐるから
おれも死んで
こゝろがうつり
てゐるから



一筆代書
山姥の御
おれが死んで
こゝろがうつり
てゐるから
おれも死んで
こゝろがうつり
てゐるから



おれが死んで
こゝろがうつり
てゐるから
おれも死んで
こゝろがうつり
てゐるから



おれが死んで
こゝろがうつり
てゐるから

三支圖會
陽靈山神ハ状人ハ
飲テ二首あり
と記ス天地の
造化ニ関ル分れハ
西道ノ人も多クモ



おれが死んで
こゝろがうつり
てゐるから
おれも死んで
こゝろがうつり
てゐるから



御



八代子
五十年
のちのせい
のちのせい
のちのせい
のちのせい
のちのせい
のちのせい

「小僧のうしろ」
「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」



「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」

「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」
「おのれは」

あつらふるるべし 煮花で籠あつらふを喰ひ身を破るる
あつらふべし 光陰早くしては伴程あつらふ先報さるる
まはしく悪相善相めらるとえと左りの頸ハ戯場の敵
殺の如く右の首ハ實事師のごとく也とらあつらふ
あつらふるるべし 伴悪念死つ時ハ善の頸志をとり小居
ふり心小善念死つとたハ悪のくびうたふひるる
まろ人の心の善悪りく小務りまろるるは如
あつらふるる

悪の首ハ其れは悪氣我修りて家内のははどと邪見小好
あつらふるる 伴ありて由打解さ大聲よびてあつらふ
あつらふるる 善の首ハ常小悪根をとり毎朝修行者
或ハ乞食非人小子の肉をとり又ハ貧乏の肉を擗り折つ
あつらふるる 善の頸ハ法徳をとり傷くハ悪の首
あつらふるる 人の心もまろるる
あつらふるる 日思業橋を通りける小善の首ハ寺あつらふ
あつらふるる 思ひ又悪のくびハ小舟で走つせんとおもひ心ハ二ツ身ハ一ツ

行川^{ゆき} 夢^{ゆめ}の心^{こころ}まよひて 志^{こころ}のんふくれたる 善^{ぜん}の首^{くび}今^{いま}
日^ひ小^こ叶^えの故^{ゆゑ}の右^{みぎ}の足^{あし}踏^ふむり強^{つよ}くともく 寺^{てら}高^{たか}くふ
行^{ゆき}くつる 房^{ぶどう}りともち 草^{くさ}卧^ふて 善^{ぜん}のくびうつりしと
して 步^{あゆ}ゆりつ 善^{ぜん}の首^{くび}の目^めを 匹^{ひら}のあう 小^こあや 身^みうつる
小^こ道^{みち}ふて 善^{ぜん}のくび友^{とも}どもふいざるの 料^{りょう}理^りをへ 遠^{とほ}りの
十^{じゅう}分^{ぶん}小^こ酒^{さけ}飲^のむるも 友^{とも}どもと 酒^{さけ}狂^{くる}のく 友^{とも}どもと 喧^{けん}嘩^か
仕^し出^でくまひ 小^こ打^{うち}つる 山^{やま}つる 善^{ぜん}の首^{くび}へ 平^{へい}常^{じょう}
下^か戸^こある 小^こ衣^えむけく たる 善^{ぜん}の首^{くび} 酒^{さけ}氣^き不^ふ獲^わぬに

寝^ねく 心^{こころ}ひ多く 衣^えうつる 跡^{あと}めて 目^めを 覺^さま 後^ご悔^{かい}あり
人の 家^{いへ}の 善^{ぜん}の 友^{とも}と 表^{あは}えの 朝^{あさ}の 早^{はや}と 遅^{おそ}く 小^こよの 心^{こころ}
貝^{かい}原^{げん}先生^{せんせい}の 心^{こころ}ひきり 小^こ工^{こう}つり あり 善^{ぜん}の 首^{くび}へ 毎^{まい}あは 起^{おこ}
て 其^{その}日^ひの 家^{いへ}業^{わざ} 小^こ取^とかふる 善^{ぜん}の 心^{こころ}ひいつる 朝^{あさ} 寐^ねを
好^{この}む 善^{ぜん}の 顔^{かほ}が 益^{えき}飯^{いひ}炊^ひか 時^{とき}分^{ぶん}まじり 善^{ぜん}の 心^{こころ}ひいつる
あり 善^{ぜん}の 心^{こころ}ひいつる 善^{ぜん}の 心^{こころ}ひいつる 善^{ぜん}の 心^{こころ}ひいつる
家^{いへ}業^{わざ} 小^こ怠^{たい}りて 金^{かね}づゝを 定^{さだ}め 由^{よし}及^{およ}毎^{まい} 善^{ぜん}の 心^{こころ}ひいつる
その 心^{こころ}ひいつる

神仏を祈願ふ心しんぶつをいのねがふこころを清くきよして他念たねん多く一向一心いっしやういっしん
 何んぞこれなにぞこれは徳とくあるべし其驗そのげんもある事あり己おのれの徳とくある
 華はなをいふて毒理どくりを願ねがふけ神仏しんぶつを悪あく修しゆ入いれの方人うらみこころ
 おせんと願ねがふの事あるは祈心いのこころある縁えんの英えいに如ごとく
 戒見かいけんて心こころをうつし邪念じやねんを發はせしやうある縁えんを
 する心こころあるはいふとどかへよしの神仏しんぶつもて由利益ゆりやくある
 事あるはいふとどかへよしの神仏しんぶつもて由利益ゆりやくある
 事あるはいふとどかへよしの神仏しんぶつもて由利益ゆりやくある

ある救善きうぜんの願ねがつてまて徳とく入いれする戒かいうらうらひ
 惡あくの首くびへ土着どちやくへ思おもひり金子きんぎを棄すててせりつる
 善ぜんの首くびへ土物どぶつかとお驚おどろき目を覺さしやうされば善ぜん人と
 二つのくびをひとつは體たいをうつしてひとつは惡あくは首くびへ
 金をかねをかき出だして心こころよく思おもひんと思おもひし善ぜんのくびみ
 見けん付つらまははよかぶれうぶまこと善ぜんの願ねがふたづつを極ごく
 んで打擲うちなげするつら願ねがふ極ごくを解とく是則これすなはく心こころの持もち
 中ちゆうめて我心わがこころは身みをせむるの道理道理あり
 寐ねて吐はつてをきく我身わがみふかると善ぜんへの如ごとく惡あくのくびを



「三つのび
よめ
ゆりて
あそ
る」

「三つ
のび
よめ
ゆりて
あそ
る」

「あし
のび
よめ
ゆりて
あそ
る」

「あし
のび
よめ
ゆりて
あそ
る」

「あし
のび
よめ
ゆりて
あそ
る」

「あし
のび
よめ
ゆりて
あそ
る」



「あし
のび
よめ
ゆりて
あそ
る」

「あし
のび
よめ
ゆりて
あそ
る」

「あし
のび
よめ
ゆりて
あそ
る」

「あし
のび
よめ
ゆりて
あそ
る」

「あし
のび
よめ
ゆりて
あそ
る」

「あし
のび
よめ
ゆりて
あそ
る」

「あし
のび
よめ
ゆりて
あそ
る」





此のやう
 のやうな
 女は
 多く
 居る
 といふ
 事
 あり
 といふ
 事
 あり

此のやう
 のやうな
 女は
 多く
 居る
 といふ
 事
 あり

此のやう
 のやうな
 女は
 多く
 居る
 といふ
 事
 あり



此のやう
 のやうな
 女は
 多く
 居る
 といふ
 事
 あり

此のやう
 のやうな
 女は
 多く
 居る
 といふ
 事
 あり

此のやう
 のやうな
 女は
 多く
 居る
 といふ
 事
 あり

此のやう
 のやうな
 女は
 多く
 居る
 といふ
 事
 あり

善の首を打擲して同じ我體を痛め難減しなるが
あきより二つの首大きき不和となり善の首は飯
を喰ふと思つて悪のくびは髪を結んといひ善の首
が寒いとて重衣を着せよといひ悪のくびは所
をもて裸で扇をつらふ善の首が寺來りふゆると
思つて悪の首は約ふ紙んといひ悪の首が紙うつを
てのこけきぶ善のくびは干物で茶づけを喰ひ
何事もてんぐむきくして我身ぐる心のはゆる

あつた大まふ不自由のからごとくありあたる
善悪二つの頭はくひふらと合てくせなるが
夜心のつらふより二人前の夢は具するふ地獄
がその忽然と現るごとく善の首をいさるいよや
がて極樂浄土へいよと志めんとするふ所へ赤鬼あ
らられて悪のくびを地獄ごとくへ引よびんとするふ
鏡はあつた影のくびはあればとらふもかたがた
たたく双方争ひあつたをうりたるが終ふ地獄極樂

の境まで乗りおちぞう菩薩ら金箔を取出し
手早く善の首の右の腕へもくをたし多ふ悪ら
又大きやうなる釘板より出して悪のくびの舌は
ぬんとする如く双方より何れそひけきども何れ
齧つゝあれを陰方なく焔魔王地藏菩薩等
さあぐ相傳のうへま所けしびの救してあやたま
かえさんびのちり悪の首の上へ罷板はく
ふおめては自身のととの目もふ毒無善はくひも

地がくへおとほをさしこれども善の頭まはく善
行を積ふおひては悪が首がきりわく救し下
俱ふ極楽へちびくべしと焔魔王より急度
いひつけぬくちやを入席のふと思へば夢の覚るる
夫より悪の首の夢のつげのおそろしふ初て我
おとろひのつとまの事を知り先兆を悔て頭を
たききりけつぐ爰小鎮鬼道人とひえる有徳の
人なりは聖のおしえをうけんと然人毎日つとひり

よしを聞て彼善悪の首も道人は許へし
其教へを受てしけり

其時鎮鬼老人二ツの頭ふれして曰

義楚六帖二十四ふいり一匹の犬井の中を覗き

我影の水ぶるを見て怒りこれふ故命んて終ふ井

ふ落て死是我ありと思ふが故ありと云

皆人我ありと思ふが故ふその心我身を責めて

一生煉苦しむ彼大なる我うげを見せし

己身をうしあふ事これ一身すして二心なるがゆ

ゆが二ツの頭すひふ争ふも入とふ不問ト今より

後悪を切て善ふのときむる一とて打出の小槌

りて悪の頭を打ちきりたまら其あふたなる

痛と我ありゆけり

鎮鬼道人のかげふて悪の首もさび落て公を

まよふとふ無底の着りのとあり善のくびちきふ

返びはるく五常の道を守り二纏ふ者を

空^{うら}業^まふ^りと^うら^らお^らと^うら^らる^る各^あ利^りを^そ捨^てて^お忍^び心^を
を^ほど^しけ^り故^ゆに^いふ^ふ其^{その}家^い富^ふ榮^え久^く子^こ孫^{そん}と^して^おす^まへ^り
と^して^おす^まへ^りの^あ春^{はる}を^から^いぬ^けり^とす^べし

飯田町五丁目

古屋氏

乙巳卯月書之

古風成